

裏庭に花咲く頃

ふとした思い付きで、冬の裏庭に寝転がってみた。土は冷たく、水の匂いがした。地面に触れた指先は本当にかすかに沈んで、背骨には固さが伝わってきた。見上げる都会の空には、点のようなまばらな星。目を凝らしていくと、合間に見えていなかったものに気づく。透明な空気の塊がおおきな帯や蛇のようにうねり通り過ぎていくことも分かるようになる。あらためて風と名付けた。

ひとしきりそうした後、飽きて立ち上がり、部屋に戻る。そのときに奇妙なことが起こった。立ち上がるわたしと、寝転んだわたしがはがれて、取り残された部分があった。土に触れていた部分だけが、透き通る輪郭としてそこにとどまり続ける状態で固定されてしまう。非常に薄い、ほとんどこの世にはないものであるので、立っているわたしから失われたものがあるとは誰にもわからないだろう。ただわたしだけがそこに残されたものがあることを知っている。

立ち上がったわたしがこちらを見ている。まだ寝台のなかにいるようなあいまいな意識でそれを見つめている。向こうは随分しっかりとした面持ちをしていた。たぶんわたしは残滓のようなものなのだろう。それが残り香のようなものなのか、使い終わった濾紙にこびりついた不純物のようなものかはわからないが。

一刻ごとに意識は薄れていく、輪郭を失い、地面に溶け込む感覚がある。ゆっくりわたしが失われ

ていく。恐怖はない。地面は先ほどのような冷たさはなく、温度というものの自体もだんだん分からなくなっていく。歓喜もない。どんな感情もない。

仕事が忙しく、しばらく庭を見ることもなかった。そうなると定期的に奇行に走ってしまうので、獣のような叫びをひとしきり一人で上げてから眠ったり、普段買わないお香を急に焚いたり、早く寝ればいいのに五段のトランプタワーに挑戦したり、芋と玉葱と豚肉だけの塩味の煮込みを作って一週間食べ続けたり、無音の中オリジナルの舞踏をひとしきりやったり、泥のように眠ったり、悪夢にうなされたりしていた。久しぶりの休日にはほとんど眠って過ごしてしまった日に、せめて夕陽であろうと日光を浴びたほうがいいだろうと庭に続く大きな窓を開けて、そしてその庭で残された輪郭のことを思いだす始末で。

それが外側があいまいにぼやけて、地面に広がり始めているのを見た。どうしてこんなことになったのだろうと不思議な気持ちでいる。地を覆うさまは一種の地衣類にも似ていて、かつてわたしの一部であった面影はだいたいの形以外にはなく。ぼんやりとそれを眺めていると、手に持ったマグカップのコーヒースティックはゆっくりと冷めていき、一口ごとに香りを失い、減るごとにコーヒースティックそのものから離れていく。

かすかな香りが途切れかけていた言葉をつないだ。随分遠くに行ってしまったそれを手繰り寄せてコーヒーという語を呼び戻す。わたしは随分人間の身から離れ今はもう土や石の方が近くなった。雪が降って残って溶けていったときはその名前をずっと呼んでいた。こうなってから本当の名前を知った。雪と呼ばれた彼らの。降っているときと積もっているときと、溶けて地表を湿らせているときと、ちいさな岩石の間に染み入って、ずっと深くに沈んでいくとき、揮発をして空中にあるときとすべて違う個々の名をもち、それは震えでも光でもないのでかつては存在すら感じることもできないものだった。

そしてその名前すらすっかり忘れたころかつて深く地の底へ向かっていったものたちを追って伸びていくものを感じた。それは暗闇の中で輝き、細く強く夜の闇の中で土を穿ち砂を退けて、さらに下へと進む。暖かくなったり寒くなったりする気温をハグとキスのように感じながら、根という概念に触れる。地面の上で淡く広がり切ったわたしの中で植物が成長している。もはや分かち難く結びついた土や砂たちはそれらに押し出され、変形し、あわせてたまの雨に打たれ弛んだ。小さく薄く広がった葉は昼の光を浴びて吐息をもらし、光はその上できしきしと跳ねた。さまざまなもの名がまた置き換わっていく。次々に生まれ死んでいくものたち。小さな命と無生物のはざまにあるものたちが輪郭を失いほどけまた現れる。どこから来たのかという問いに答えるものはない。

どうして目を瞑ると次の日になっているのだろう。眠っているということは知識としては知っているけれどこれは本当は何なのだろう。死というにはあまりにも温くほのかに明るい。疲れていると細切れになった夢のなりそこないばかり見る。さっきまで歩いていたはずの街並みは急に古い学校の教室になって、誰も居ない空港にぼーんという音が響いて、無機質なプールサイドになってタイルの床にあるはずのないカーテンが揺れた。庭。わたしの、正確にはわたしのものではない借りられた小さな庭。

冬というには温い空気、強い風が細かい砂や花粉や化学物質を吹き飛ばして来て目の奥と鼻と耳がつながる部分がこそばゆい。涙と鼻水があふれて溺れそうになる。花粉がよく考えたらあまりにも命だ。驚いて見上げた空は淡く濁ってる。

目が覚めてカーテンを開ける。夢の中とあまり変わらない風が吹いていて驚く。いつも気が付くと季節が変わっている。

窓の開く音が久しぶりにして、わたしがこちらを見ている。油気が失われた髪の毛が強い風に揺れている。おーいと、音の声はもう失ってしまったのでそれ以外の方法で呼びかける。もちろん聞こえないので答えはない。わたしは随分眩しそうにして空を見上げている。教えてやりたいことがいくつ

もある。今わたしたちの間を通り抜けていった風の本当の名前。それや鳥の糞によって運ばれた新しい草花の種の事を。プロペラの片方だけのような翼果がいまおまえの足元にも落ちてきているんだ。それは随分と遠くから、今のわたしにはそう感じられるが実際の人間の思う距離とは違うかもしれない。空を飛ぶため運ばれるために磨かれた形が美しい。こうなるまで知らなかった。温んでいく土に、日曜日の焼きたてのトーストの上を滑らせたバターのように広がって。便りを出してやりたいなと思った。新しいことを報せるための。

風の日の後に雨が降ってそれがまた雲のようになって、水気混じりの大きな塊がカーテンの向こうで滑り落ちていく気配を感じている。先日の暖かさが嘘のようにしんしんと冷え、電子レンジでチンする湯たんぼを抱いて寝床に入る日が続く。身体に押し当てたそれは起毛のカバーの奥にどろんどろんと液体が入っていて不思議な科学の力で暖かくなる。どういう仕組みなのかは分からない。そうなるということしか知らない。ただ暖かくなってくれるだけでいい。複雑なことはもう考えられなくなつて眠りに落ちていく。断片的な夢をまた見る。行ったことのない寂れた港町のコンクリートの防波堤に巨大になって佇み、迷路のような団地の奥の部屋で土塊の枕を割った。その中から出てくる無数のみみずが怯えている。どうして虫が怖いんだろう。わたしのほうが絶対に強いのに。きつとわたしが

しらないだけで窓の向こうの庭にも小さな虫がたくさんいるのだろうなと思う。できるだけ見ないようにして暮らしていきたい。

また冷たくなったり暖かくなったりする。広がったり小さくなったりするようにも感じられる。ぞわぞわしてぴりぴりとした。小さな水の粒がゆっくり落ちてくる。また浮き上がる。神々しい神殿の柱がいくつも立ち並び地の表面に降りてくるが主はいない。ただそれは立っているだけ。まどろみの匂い。悲しみと名付けられていたものが空気の中に細切れになって漂う。失われていたものをもう一度無くしてしまった。ただそれはそうあることが自然で、金の奥底でそれに気づく。犬の遠吠えが聞こえる。土のなかは賑やかだ。水も根もたくさんさんの命もある。寂しいとは思わなかった。自分の中に反響し続けた言葉ももうだいたい輪郭があいまいになってきた。揺れている、揺れている、揺れている。呪文も祈りも波のように崩れて、等しく鳥たちが啄みにやってくる。芽が揺れる、草が伸びる、蕾がつく、花が咲く。

花が咲いていた。小さな花だった。白い。わたしはその名前を知らない。どんなに忙しかろうと、悪夢ばかり見ようと、なにも見ずにいようと、花はそれに関係なく咲くのだとあらためて思った。世

界はいつでもわたしの考えの外にある。久しぶりに庭に出て、触れて、温い、もう刺々しくはない風がわたしの頬を撫でる。あくびが出て視界の端が涙で歪んだ。誰かに呼びかけられたような気がするけれど、壁に囲まれた小さな裏庭にはもちろん誰もいない。

もう少しするときっと今度は、わたしにも名前のわかる花が咲き、散り、青葉が輝き、紅葉をし、果実が実り、すべて枯れ、朽ち、一時眠り、またこのように現れるのだろうか、知識で知っていたことが不意に形を持って現れた気がした。いい天気で、洗濯をしてそれを干したら、コーヒーを持ってきて椅子を出したら、ここで飲もうと思う。